95　誌上発表　浅田宗伯編輯『皇朝医叢』について

渡辺　浩二[1,2]，天野　陽介[2,3]，小曽戸　洋[2]，花輪　壽彦[2]

[1] 渡辺産婦人科，[2] 北里大学東洋医学総合研究所，[3] 日本大学大学院文学研究科

〔目的〕

浅田宗伯（1815–94）が遺した医学叢書『皇朝医叢』の概要と現代に於ける意義を明らかにし，その内容を広めること．

〔方法〕

『皇朝医叢』は，内藤記念くすり博物館収蔵本（35120 皇朝医叢 宮集・羽集中・下，35867 皇朝医叢 羽集上・中・下〔実際は上巻のみ〕）及び東京大学総合図書館収蔵本（V11-411 皇朝医叢二～七巻，V10-408 皇朝医叢続集及び同続篇）を使用した．また概要は『浅田宗伯書簡集』及び『皇朝医叢』を資料とした．

〔結果〕

『皇朝医叢』は，浅田宗伯が日本漢方における優れた見識を収集編纂したものであり，日本漢方を見直すうえで，また宗伯の医論を研究する上で必要不可欠な医学叢書である．

〔考察〕

『皇朝医叢』は，内藤記念くすり博物館収蔵本と東京大学総合図書館収蔵本を併せることで当初構想されていたものが全て揃うことを確認した．序文は，中国朝鮮の叢書を列挙した上で，我が国にも彼の国に劣らない医説があり，数年来集めていたという．明治六年（1873）斎藤・安井・石丸の弟子三人が，宗伯の志を助けたとある．浅田宗伯から服部甫庵への書簡を収録した『浅田宗伯書簡集』，明治十年一月七日 条に初めて『皇朝医叢』の名がみえる．「皇朝医叢ハ，二三冊貸失，甚遺憾之至，当年ハ，再輯ノ心得ニ有之，」と，少なくとも明治十年には既に編輯されていたことがわかる．また同年四月十四日条，六月二十一日条に『皇朝医叢』編輯起草について，「此書ハ，皇朝医学ノ一斑ヲ後世ニ存候迄ニ編輯仕候間」，「但数年来裒輯罷在候抄録ヲ鶏肋ニ存スル而已．併皇朝医人之識見，是以徴之一助トモ存候間」と述べている．明治維新後，東西一変，漢方医学が衰退する中で，宗伯は臨床の秘伝を『勿誤薬室方函口訣（1878 刊）』で開陳し，また幕末には『皇国名医伝（1852 刊）』，明治に入り『先哲医話（1880 刊）』という形で先哲の伝記及び医説を披露していた．漢方医学衰退の兆しは，明治七年及び八年に発布された，医制及び医術開業試験に端を発す．その後の宗伯の著述は，漢方医学がいかに優れているかを理論的に，また確かな臨床実績として示し，西洋医学と同等の位置におかれるように働きかけるものであった．このような流れの中で，『皇朝医叢』という医学叢書が再編輯された．

『皇朝医叢』は十三巻，学規・医説・方論・文集・列伝の五類に分類される．医説・文集は未刊行の文を広く集め，方論は医按に代え，列伝は『皇国名医伝』の意志を引き継ぎ，墓誌銘を中心に百人以上が記載される．学規は，森愚然，名古屋丹水，後藤艮山，山脇東洋，吉益東洞ら古方派を中心とした九人の医則を載せる．医説には百余りの論文を載せ，後藤艮山・椿庵，香川修庵，亀井南冥，吉益南涯・贏斎，中西深斎ら古方派の系列を挙げ，また山田図南，百々漢陰らを載せる．さらに考証学派の多紀桂山・柳沸・莅庭，喜多村直寛らが名を連ねる．特に目を引くのは後藤家（34），山田図南（8），喜多村直寛（10），多紀家（11）及び桂山門人軒村世緝（10）の説を多く載せる点である．方論では，桂枝湯類・麻黄湯類・葛根湯類など方剤を 11 類に分け，永富独嘯庵，吉益南涯，中西深斎ら古方派の医按を多くとる．これら学規，医説，方論を概観すると，宗伯が本邦医学叢書を編纂する中で後藤家，多紀家の医論及び古方派の臨床を重要視していたことがわかる．また取り上げた医論は宗伯が京都に遊学した天保三年（1832）頃には既に医界で論争され尽したもの，その後江戸に開業して（同七年頃）から数々の著作をなすまでの間に，宗伯自身が討論し議論を重ね身につけてきたものであろう．

浅田宗伯の処方集である『勿誤薬室方函口訣』は現代日本漢方処方運用の土台となるものである．『皇朝医叢』は浅田宗伯の医論を解釈する上で，また日本漢方を根柢から見直す上でも必要不可欠な医学叢書である．